

五 サヌカイト（讃岐石）（カンカン石）

讃岐には地球のどこの地殻にも、まだ見つかったことのない珍しい石が出る。それが、外でもないカンカン石だ。その呼称は打てば美しい金属音をたてるところからきているが、古くは金石カネイシとも呼んで、この石には金がはいつていると考えられていた。

昔、中国で楽器に使用した石に、「磬けい」というものがある。磬は、聲と石の会意文字で楽器につかった石である。すでに「書経」に禹貢篇にも見えるという。それでその中国の磬に当たるものだといっているので、江戸時代にはカンカン石を磬石という漢語で表現して、讃岐の磬石と呼んでいた。

ところが、明治になり、東京大学に地質学科が設けられ、明治八年（一八七五）初めて、ドイツから迎えられたのがナウマン象の名で知られている、エドムンド

Ⅱナウマン氏という人であった。

この人は、日本で最初の地質図を作り、随分と、日本地質調査に貢献し、約十年間日本に滞在して、明治十七年（一八八四）にドイツに帰っている。

そのナウマンが讃岐のカンカン石（磐石）を採取し、それを同僚のドイツの地質学者ワイシエング博士に送って研究してもらった。その結果、この石は世界のどこにも、まだ発見されたことのない新種の岩石だとわかり、その産地「サヌキ」の名にちなんで学内、サヌカイトとして、世界の学界に発表した。そのワイシエング博士の発表は、明治二十四年（一八九一）のことで、以来このカンカン石によつて、世界の学者に知られるようになったのである。

勿論、カンカン石のように音を出して楽器になるような石―磐石は他にもある。古いところでは「雲根志」―（近江の石亭―木内小繁が全国の奇岩を集めて著した書物、明和九年（一七七二）発行）にも

「日本における磐石の産地は、讃岐と安芸の二ヶ国で、山城の鞍馬山僧正ヶ谷か

らも稀に出るが、その品はひどく劣る……又摂津国能勢郡大丸村に方二間ばかりの形、鉦鼓のような石があり、これを打つと磐の如き響があるという、又土佐の蹉跎岬にの鉦鼓石という大きい石があつて、これを叩けば、その声数町に響く、これも共に磐石である……」

と書いている。

勿論、江戸時代の磐石「といったものは、岩石名でなくて、ただ、叩いて合図や鐘太鼓の代わりに用いた石のことである。だから、磐石は用法上の名で、磐石――則――サヌカイトではない。

サヌカイトが知られてから、それに類似した岩石も研究せられた。

或る種の百貨辞典などには、サヌカイトは、讃岐特有のものであるが、東北、関東では殆んどその例を見ないが、奈良県の二上の南部と愛媛県の高浜附近にも、ほぼこれと同じ岩石が露出している。古銅輝石、また紫蘇輝石の班晶を肉眼的に認めることが出来る……などとサヌカイトと同種の鉱物組織のものもあると書いて

いる。

しかし、決してサヌカイトと同一のものではない。

岩石の命名法は、その構成する鉱物組織によるので、サヌカイトは、「古銅輝石安山岩」とも呼ばれる。古銅輝石を含む安山岩という意味での分類である。

しかし、サヌカイトの場合は、他の古銅輝石安山岩と違って、その古銅輝石がきわめて細晶で、半玻璃質になっていて、貝殻状の割れ口を示す。表明は灰白色の朽木のような形を示すが、これは内部構造が、流状になっていて、風化に対する抵抗力が異なるためだと考えられている。ともかく、カンカン石の場合は、古銅輝石が含まれていても目に見えるような班晶はなく、黒曜石のように玻璃質で黒く、妙えなる金属音を発するところに特色がある。同じように屋島の「豊石」―これも実は古銅輝石安山岩である。しかし、「豊石」は板状節理で、サヌカイトはおよそ違っているのは誰にでもわかるであろう。

奈良の二上山や愛媛の高浜などの安山岩は古銅輝石の含まれたサヌカイトに似

た黒色の安山岩ではあるが、サヌカイトのような美音は発せない。サヌカイト以外の讃岐の安山岩には、これらと同じように黒色で、古銅輝石を含むものが多いので、これを特に讃岐式安山岩と呼んでいる。

ともかく、カンカン石―これ程、われわれに手取り早く鑑定の出来る石はあるまい。叩けば鳴るのだから、カネ石とか、磐石といった昔の呼称が、どうもピンとくる。

「古事類苑」に引用している想出著、聞奇集には、讃岐の磐石のことを、

「…日本にては讃州白峯の一山は山内悉く磐石にして、それに土の皮を被りいて、その上には草木覆い茂りたり。この山、その高さ三里計りにして、京の愛宕山程の恰好かっこうなり。山のなだれ口、または崖の崩れ口などは悉く磐石にして、四五寸より尺余り、また大なるは二尺三尺四尺位のものありて、厚さ四五分より、一二寸、また厚きは七八寸より尺二三寸までのものもあり、形は丸きも、三角ばりのものも、長きも短きも、種々にして、定らざれども、皆、金鉄の音にして、全く恒の磐の

音ながら、石毎にかわりて、十が十ながら同じ音はなし、随分律によく合うもあるべし、先薄き程、音色よし、少しにても欠損じた時は音の響もなく、決して金鉄の音をなさず、しかれども十が七八まではきず多くして金玉なるは至って稀なりといえり……。

昔は磐石なることを知らなかったが、天明に大内（京都御所）炎上の後、御所の磐、焼けたりとて、白峯へ取りに來りて、後一山の石は磐石にてありたりと云うことを所の者も初めて知りたり。それまでは土俗、かね石とのみ唱へ來りしとなり……」

と書いています。

この「想出著聞奇集」によつて、天明（実は天明八年正月）の京都の大火に皇居も炎上して、御所にあつた磐が消失したので、讃岐の白峯に、磐石をとりに來た事実がわかるのである。

宮中から、わざわざ大切なものとして取りに來たという―そのことで讃岐の人

々も磐石としてのかね石（カンカン石）を再認識したらしい。

つまり、それ以来カンカン石を磐石と呼んで貴重したもののようである。

この宮中天災の天明から、半世紀程以前―享保年間に有名な実学者、青木昆陽が、その著、昆陽漫筆―その中に「楽石」と題し、「先年或る人『楽石』とはいかなるものかと問ひしに、楽石は楽器に用いる石なるべしと答う、始皇帝の碑に楽石の注あり、これは楽器に用いたる石であることは明である」

と書いている。「磐石」のことであろうが、磐とはいわず、「楽石」とあるところを見ると、江戸時代でもこの天明年間―皇居炎上の一件から「磐石」という名称が讃岐人ばかりでなく、一般に知られるゆになつたのではあるまいか。

地もと、讃岐の古い文献でも翁媪夜話のようにやや古いものには、八十蘇水やそばのみずのところ、

「火燧石（ひうちいし）名品、また一種の石あり、これを撃てば響き鐘の如し……」
とあつて磐石とは書いていない。しかし、天明以後の（文化文政頃）全讃史に

は中山城山が、「白峯の磐石、この石の音響、天下無双なりという」と記述し「磐石」の二字を用いている。

ともかく、讃岐では、「皇居から、はるばる白峯山に、「磐石」として取りに来たことが、「かね石」についての認識を新にし、楽器（合図用）とし、寺院―役所：後には学校などでも、産地近くでは今のベル代用に使用するばかりか、好事家は、それを蒐集し、広く盆石、或は植木の添景に利用するようになり、白峯の磐石として、産地白峯の名もよく知られるようになったらしい。

かね石―磐石―カンカン石―サヌカイトのいわれ因縁故事来歴―それを一応考えて見たが、その産地として白峯が名高くなつたのも天明の宮中磐石採取一件からであろうが、実のところ、白峯につづく国分台―それも実は国分寺町の通称西山、―蓮光寺山と坂出の金山ここが、サヌカイトの主産地なのである。

西山―ここは国分駅からよく見える、麓には県の農事試験場の果樹園があり、そのあたり一面がサヌカイトの礫でゴロゴロしている。その石ころを除いて畑を

開墾している。

元来、この山は花崗岩の基盤を貫いて、サヌカイトの噴出があり、その上に別種のいわゆる讃岐式安山岩が溶岩として載っている。

つまり、サヌカイトは安山岩の噴出よりも古いことを物語っている。私は、素通りながら、この山に登ったことがある。山の西側と山頂附近にはサヌカイトは見られなかったが、山の七八合目から下に降ると、その南と東側にサヌカイトの石礫が次第に多くなっていた。ことに私の足をとめたのは安山岩（サヌキ式の輝石安山岩）塊の中に、サヌカイトの石礫が捕獲岩となって結核状になっているのを見とどけ、サヌカイト噴出が、輝石安山岩よりも先行している事実を知ることが出来た。

どうも、地質関係の書物などには安山岩の噴出、その後、サヌカイトの噴出：と書いてあるようだが、その説明は誤りであろう。

この山の東側には鉄条網が張られて「石を取るべからず」の貼札があった。

ここは私有地であろう。これが蓮光寺の山で、屋島や高松などで「お土産」として売るカンカン石―その生産地であると直感した。

それはかつて福家惣衛氏が、新香川誌上で、サヌカイトの事を書き、

「蓮光寺山のは岩盤が露出している。岩盤は柱状節理をなしている。この節理の間にテコを押し込んで崩すと鯉節型の小片ができる、それを打てば美音を発する、この蓮光寺山では約二十米の岩脈があり、山上の熔岩に連っている、これが熔岩の溢出口と考えられている」とあったが、「鯉節型の小片」―成程持運ぶお土産品には小さくて軽い、しかも声の出易いのがよい。―それで土産品にするカンカン石は、この蓮光寺山のものだろうと、かねがね想像していたからである。

残念ながら、その採取場へは行けない、ちようど山の東南側の七八合目あたりに山を崩したところが、国府駅からもよく見える、そこが「お土産」として売るカンカン石の産地なのである。

坂出の金山、―

この山は、どこを歩いてでもサヌカイトの礫片が、ごろごろしている。

山麓の福江や八十蘇水^{やそば}あたりの畑や溜池などにも散乱していて、民家の土台石などにも使用されている程である。

山の北斜面は高いところ七合目附近では花崗岩であるが、それをつらぬいてサヌカイトの噴出があり、その破片の石礫は、基盤の花崗岩土の中に散乱している。ともかく、サヌカイトの産地としては今日、この坂出の金山が、鉱物学界でよく知られている。それに戦時中、この山の上でボーキサイトを採取したこともあるので、現に玉川大学の百科大辞典にも、アルミニウムの鉱石ギブス石の産地として坂出の金山のことが誌るされている。

金山に出るギブス石は、日本でも数少ない粘土鉱物で、秋田県の西目村、福岡県の八女郡の粘土注と、この坂出の金山だけである。金山ではサヌカイトの分解して生じた紅土中にこの鉱石が団塊状に出る。戦時中アルミニウムの原料として採取していたのは、このサヌカイトの分解した粘土鉱物ギブス石で、俗にはボー

キサイトと呼ばれるものである。

宝暦時代、地元の大庄屋、本條氏の書いた、「綾北問尋抄」に、

「此山に金の蔓、金剛というものありとて、他州より金掘をよびて掘せけるに、当山の紙借しませ給ひて、金剛を取つて海底に沈め給う……」などと古い伝承を伝えていて、今も坂出の沖に金手漁場の名があるのも、実はこの伝説とのかかわりあいがあるのだが、それはともかく、このことから察すると、「金山」という名もおそらく金（かね）の出る山という意味でもあろう。何分、かね石といった、カンカン石―それが、ざらざらある山だから古くは或は金（かね）が出るのではないかと、金掘の山師が、入り込んで試掘したこともあつたのであろうか。

ともかく、昔の童話のカチカチ山―ならぬ、この金山は叩くとカンカン鳴るかな石の山だ。

この坂出の金山と国府の西山―これがサヌカイトの出る主産地である。